

陰影偏愛

暗がりに沈みてじっと待つ部屋の隅に光彩それもまた闇

薄暗い部屋、古びて色褪せた畳に座っている。深い庇や軒があることで、日光は弱められて、ほとんど真横から薄く差し込んでいる。部屋の隅はすっかり暗く沈んでいる。私も同じように暗がりに沈んでいる。壁側に置かれた桐の箆笥、飾り茶棚に置かれた陶器の置物が、差し込む光をわずかに受けている。その光を受けた物の輪郭がほのかに浮かび上がっている。そこに漂う空気そのものが、有機体のように鈍くうごめくようで、目が離せない。ただ真っ白く明るいだけではこんなには動かされない。そこには光だけではなく、闇があるから、美しい。そして光は闇がないと存在しない。闇そのものでもある。そんな歌である。

私は十代の頃よく写真を撮った。道端や空を撮るのではなく、人の表情の美しさや、動きがそのまま流れるようにぶれて写る様子を気に入って、友人とお互いを写し合った。そして、どういうときに良い写真だと思うのか、どうしてこの写真は他よりも美しいと思うのか、よく二人で語り合った。そして、そこには必ず光と陰の絶妙な調和がある、という発見をしたのだった。写真は光を捉える物なので当たり前と言えば当たり前だが、色彩よりも、物や人の輪郭そのものよりも、それを引き立てる「光と陰」が重要なものだった。ただ暗いだけではなく、間接的な光が生み出す絶妙な陰影が、私達の心を強く惹きつけていた。

大人になってからも私は、写真を撮りによく出掛けた。例えば、京都の古い町。うなぎの寝床と呼ばれる、間口が狭く奥行きのある町屋が連なっている。神戸の住宅街で育った私にはとても新鮮な景色だった。町屋と町屋の間に屋根の付いた細長い路地があり、通り抜けた先には屋根がなく、袋小路になっている。町屋に挟まれた路地は屋根の下で暗く沈んで、通り抜けた先には柔らかな光が射し込んでいる。黒く染まった木の壁の間で、光と闇が混ざり合っている。たまたまなく美しい。人の流れの中で立ち止まって、心ゆくまで眺めたいと思う。しかし人の敷地なので、あまり長く眺めるのもどうかと思い、色々な路地を少しずつ眺めて歩いた。

とても印象に残っている「美しい陰影」がある。島根の石見銀山の近くに古い武家屋敷を十年かけて修繕した宿がある。まず、雑誌で見た写真に心を奪われた。どうしてもここに泊まりたいと言って、夫婦で訪れた。敷地に足を踏み入れると、庭には可愛らしく露に濡れた草花があり、土壁、自然光だけの土間、しっかり磨かれて黒く艶のある床、古びて

もよく手入れされた建具や木窓の棧など、全てのものが暗さの中で柔らかな光を受けて輪郭を浮かび上がらせていた。こんな家に住めたら、と思った。そこに滞在する人達が安らげるように、考え尽くされているようだった。私はあちこちを熱心に見て回って、見惚れていた。そんな私を見た夫は、私が少し大げさに感動しているのでは、と思っていたかも知れない。しかし私ほどに興味を示さないまでも、夫はこの空間を気に入ったようで、ここは落ち着く、綺麗だ、と盛んに言うようになった。

二人で宿の中をゆっくりと歩き、しつらえを観察した。私はこの空間の陰影があまりにも美しく、しかし現代ではなかなか作れないものだと感じ、谷崎潤一郎の随筆「陰影礼讃」を思い出していた。宿の中心に位置する、大きな台所も見学させてもらった。竈門や七輪、黒く煤けた天井、ここにはきちんとした本来の「暮らし」があった。ただの飾りや偽物の雑貨など一つもない。全て時間をかけて暮らしを重ねるための実用品ばかりだった。それぞれが、家屋にうつすらと流れ込む自然光によって、生きているような存在感を持っていた。一通り見終わって、私たちは客間に落ち着いた。

感想を言い合い、ふと脇を見てみると文机があり、一冊の本が置かれてある。

「陰影礼讃」だった。

これは偶然でもなんでもない。私は本を手にとって、少し読みながら、この家屋を修繕するのにどれだけ苦心したか、どれほどの思いがあったか色々想像した。その後もあちこち見て回り、体の芯から満たされ、ゆっくりと二日間を過ごした。

このように特別印象の強い場所が日本にも海外にも幾つかあるが、ふとした日常にある陰影こそ、私の生活を心地よいものにしていく。

とある路地裏、暗い喫茶店、午後の台所、ある日の縁側。

日が昇る前の海辺。日が落ちて数分後の海辺。

人も、物も、ほのかな光がその輪郭を際立たせている。

何年経っても、これらの一瞬の光景が瞼の裏に残っている。小さな陰影の記憶が重なっていく。

こうして美しい陰影に執着してきた私は、最もそれが楽しめるのは古い日本家屋だと思いい、縁側と土間のある古い家を買いたいと十年も言い続けていた。しかし家族には反対され、価格や実用性も折り合わず、物件自体も見つからず、ついに折れた。結局は中古十数年の、さして古くもなく、味わいも少ない家を買ひ、落ち着くことにした。長く暮らすには、家そのものよりも優先する点が多かったし、修繕すれば好みに近づけていくことはできる。その余地がありそうな家に見えたのだ。さて、ここからどうするか。床は合成の素

材、壁はなんと云うことのない布張り、台所は華美で大きすぎるものだった。早速修繕に取りかかった。大工には美しい陰影の写真を幾つも見せ、好みを伝えた。できる限り簡素に作り替え、床は自然の材木を上から貼り、壁は日本の湿気に合わせて漆喰などで塗り直した。そして、家具はどうしたか。昔の私なら迷わず「年代物の家具で揃えたい」と言い張ったところを、ほとんど新品の家具で揃えることにした。古いものだけが美しいわけではないし、造形も作りも良いものにすれば、経年劣化ではなく、経年変化を楽しむことができる。暮らすうちに古びて、一緒に年を経ることを選んだのだ。そうして出来上がった家は、綺麗ではあるがしかし陰影がまだ足りない。光を柔らかく落とすと全体的に暗くなるだけで、部屋の隅にあってほしい闇はまだ少ない。これから私は、少しずつ工夫をして心地よい「陰影」を生み出すことにする。

あれからも「陰影礼讃」を何度か読み返している。

谷崎潤一郎は現代の日本の家屋や街の様子を見て驚愕するかもしれないし、まず予想通りと言った顔をするかもしれない。残念ながら、母屋から離れて四季を愛でながら使う劇も、蠟燭だけで照らされた薄暗い舞台も、もう見かけない。それでも、ただピカピカ光るものではない、絶妙な光と闇の混ざり合いを愛する人間は今も大勢いるのだ。

谷崎は「陰影礼讃」の中で、《文学という殿堂の軒を深くし、壁を暗くし、見え過ぎるものを闇に押し込め、無用の室内装飾を剥ぎ取ってみたい》と言った。谷崎は様々な主題や手法で小説を書き、美しく論理的な文章で随筆も残した。また、よく和歌も詠んだと言う。彼の詠んだ和歌はまだ知らない。和歌を詠むと言うお題をもらって描き始めたこのとても短い随筆は、私の「陰影」の偏愛人生のほんの一部である。私はまだまだ日本的な美意識の本質を見出せていないかもしれない。文学も、暮らしも、身近にあるのにまだ底が見えないどころか、ようやく入り口にたったところだ。先人の足跡を辿りながら、学び、遊びながら、私は私の生きる時代の中で、闇の中でこそ放たれるちらちらとした光彩を探してみようと思う。それはとても楽しい暮らしだ。目に見えるものも、見えないものも、人生の光と闇が生み出す微妙な陰影が、たまらなく美しいのだ。